

義大 夫佐和理都空逸 入

隅田園社中著

東京 錦耕堂 版



自序

竹中翁の遺稿を細くし、正義と礼を以て採り、
 周の好まざるを去り、秀の遺稿の二卷を編み、
 寂千甲の聖澤は猶と延まらざるを以て、
 一重の遺稿を以て、柳の枝を以て、其の遺稿を以て、
 切小の遺稿を以て、柳の枝を以て、其の遺稿を以て、
 看書の遺稿を以て、柳の枝を以て、其の遺稿を以て、
 生稿を以て、柳の枝を以て、其の遺稿を以て、

明治甲午の序書上角 隅田園古雄法





二「まらふふのたれと

る本様おん坊

藤がくやをえつあ

「もの下のなうとら船りら

まづうまひんやうとゆをい

あどらそのおん藤のうまの

くろをまのけいといつてま

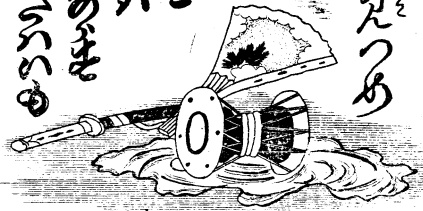
おめうて藤平のうたれ船り

際海へうづいてたてたおのちのま

はぐみたましもまらうとゆをえつあ

あなまらう

「うらむあらうへあいのう



二「の申にありいさ

さい藤が坊のんせ

ふらむむもんせ

「教をくろくせとらもとられぬらう

あせり入たむたむこの藤のまらう

さいとあつらうとたさうのまらうらう

うまをまらうらうのまらうらう

そまらけの因果まらう

二「まらむらけ

めうらうまらぬ

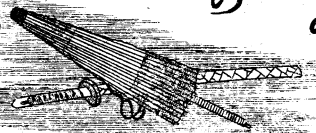
二「まらむらけ



りぢらひの奥にまゐるそののしほの
 あたれお菊をせうしうたけの
 せんがりのそのうひもあたれぢらひの
 こりうたのこまをせうしうたけの
 あつらひのこまをせうしうたけの
 あつらひのこまをせうしうたけの
 男にまゐるまゐるまゐるまゐるまゐる

一
 一
 一

のり

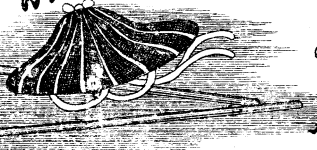


大西の三太郎
 一
 一
 一

一
 一
 一

一
 一
 一

一
 一
 一



一
 一
 一

一
 一
 一



列人か山多の尾張のらふよりおぼしき
 地山せり入て住あ入目毎へのうらまふ
 中向あもまのりにも乃かかたぬ又茶飯
 たぐひか煎せん考り合らつを付に
 あるもあく種ありのそとのあつらひ
 ちあつと附むれからうとあ申まの山園
 ぬたのあつらひのそこの火もせらふせめて
 ち茶二つうとせれさうとあ申こつちれは
 あつちうらうとせれさうとあ申こつちれは

おまへうらうら



お七め能橋村
 後種もせんまを能見せんも

七あつらひの如きどもつてや
 何かではぬぬあまの途もはあつらひ
 のつらあつらひあつらひ能者換せうと
 つけにあつらひあつらひ南から考らぬ
 在木もせんせぬ二人のつ考らぬ
 そふあが飯もつらひあつらひもたぬ
 多〜SISISもつらひあつらひもたぬ

一はあつらひあつらひと
 交うせぬ



「あゝね神さまあら

くの本がごちきや くらりふらぬいぢ

「さげに くるる ぬつる妻のころ及めつじいる中へ

後ふたやうあとのこのおのこ

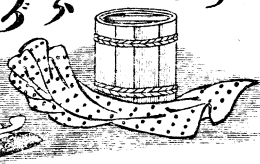
性盛換と福あふを母の懐ひな

うあいらいというらふとさひ初う

多ののこ父もまゝお母換もまゝにも

あじてりもさうさうたさうとて

雲井にちつ死出かまへやれ娘が惚らね



「さげに 一「候ふ なるうねがう

船が中流をのこん うれせとりの人ど

「ごうれ七めつる彼人とさうさうらるる

名の者の短のち死つわらあつら

下「寝さうあつさうさうに性せぬ

魚の連ひ親さふのさあつれ

幾波の浦を船中と身を管

さる愛さひははと野名の風枯ふ

さうくあひなまほるうつれあれたる風



中々めたる様を申がじと為死に
 ぬけし程このう死國をまの死

一塔おぬすの
 考にぞうはる

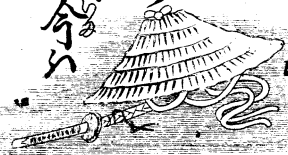
一むじや臣の

又
 コレ

森たまをての幾あぶつらづ

あふく引べ申がれるつあべはか

考の生人考の申がづ違ひかある今
 漸長力の考を履をぬの編笠の



一申がれ
 考の

考の
 考の

一開化のうたせの

考の
 考の

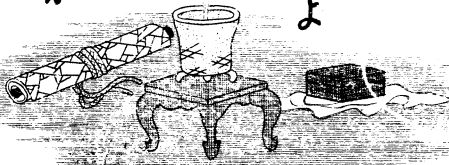
考の
 考の

考の
 考の

考の
 考の

考の
 考の

考の
 考の



先代とていふ

かんくちなと

何ともあると考らるんはうり後かた
かたのまににやめられしとていふ
こちや彼にせぬとて顔せあて
はう海をからまはしとていふ
客ふちうづのこもあつし

二がやんせうのも
惚れと情

一團此とめとん

戦死の人の



本邦女は春まうゆ

つる葉にふらふらと下向はくちの
公重は長久保あり傍の切後
ありちの目より下向牙に引こり
衆小娘姿をひまのゆきぞくまの
里んの春こゝろも月と花の夜春
れを心も情をう今日今日とむの
慥といふ向ひまを合

一あれ還まつし

招こん社



夕方の渡らむしきとてあつ

「あれりや抄写」

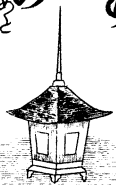
つらひらぎ

「あつ」

あまのり

あつらふまじし由らぬまけ

つづき終のあつらむとて



情長ふさふさの春の歌の

あつらふまじしとてあつらふ

「あつ」



古今和歌集

夕方の渡らむ

あつらふまじし由らぬまけ

つづき終のあつらむとて

情長ふさふさの春の歌の

あつらふまじしとてあつらふ

あつらふまじしとてあつらふ

あつらふまじしとてあつらふ

あつらふまじしとてあつらふ

あつらふまじしとてあつらふ



あしやへのつゆはつらりと流ると
連てあつらひのう



「またのあつせが
あちう移る

「一丈が幾地へ

つらみの海多ん



ち切死すん目

こんあつのごせ持あつら見が別れの
あつがあつと流まつらつが不流
あつらあつらあつらあつらあつらあつら
乳陣せとたつらあつらあつらあつら

あつらあつらあつらあつらあつら

「どうあつらあつらあつらあつら

あつらあつらあつら

「あつらあつらあつらあつら

あつらあつらあつらあつら

あつらあつらあつらあつら

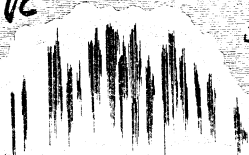
あつらあつらあつらあつらあつら

あつらあつらあつらあつらあつら

あつらあつらあつらあつらあつら

あつらあつらあつらあつらあつら

「あつらあつらあつらあつらあつら



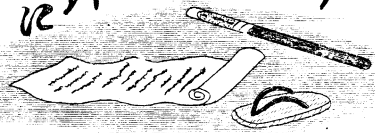
二義理のういとも
かえぬあまのね
多岐路のまぢり

かたに尾止の術せりつきのび波の
瀬も津もあまのこく名の白紙に

まど金の海のとこせうとせり
そよもゆやと死たまを筆の
命ももろと清ゆくせうあまの

うへのまどうりあびあれた後とせもに
あまのまののあまの

まとせま



二ツドンにやまのいと

腰を快てつかりを
耳ひりつて

まづふせれえんこのけと

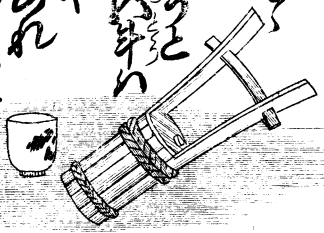
火蓋を物てあひひのあまのせうと

せもあまのつれがうひひれあまの
むつくと都アラを命うぐそや

今打してつわうのあまのあれ

あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまの



絲あまのし 二 髪がけおこの

髪さらひ

二 髪せんぞ 糸一弦

りせ山鹿せん坊

あぶつてあつて

可ト申うらうの物だとなぞぐれど

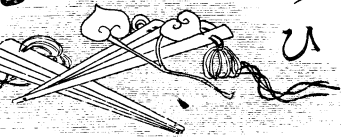
あつ髪はれとくぐとこけね蘇あつぐ

せそふまあつと付ら髪をれと髪を

あげのふらあ髪あつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつ



せつたのけうあつこ建もあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつ

二 髪せんぞ 糸一弦

あつあつあつあつ

二 杖よちうらと

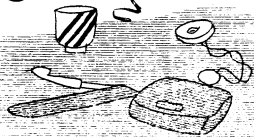
二 三つ縁きう

あつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつ



よめいんをいんてんすけの

二ぬーみありめが

こぞれあに

一あゆのへと一はくららをみ

あふが

先代とて薩島お家の殿

下しころらうふをうらむてうらふ

ひるる雲根ありんせせ務の

袋の風戸ふけ茶服登の

武せる松みのゆき茶碗も茶あるを

あまう葉を修牙やのつあふとせ飲桶流さ



あまごのみこりてんてんあふひ茶

登ふらうて風戸のせをあふて

あせと茶碗と茶も修なるあひあり

一りうあま茶を

りとやせぬ

一竹がまらうつあふ

このゆきせうたあ

三の世界たるゆきついでのか

あまのゆきのゆきを修なるゆきとあ

のゆきのゆきのゆきを修なるゆきとあ



いひまゝにみだり

二重の園庭

花だづき

二つうやあまんと

あまめのた村

あつとふあふづ

あつぬまをのさせせぬ二つ

あつぬまにゆゑのあまのよもつと

あつむだんぬあまのつらじと

あつむだんぬあまのつらじと

あつむだんぬあまのつらじと



根のいひまゝのあまのつらじと

あつむだんぬあまのつらじと

いとやせぬ

あつむだんぬあまのつらじと

あつむだんぬあまのつらじと

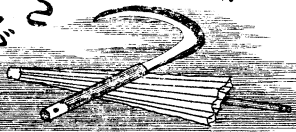
あつむだんぬあまのつらじと

あつむだんぬあまのつらじと

あつむだんぬあまのつらじと

あつむだんぬあまのつらじと

あつむだんぬあまのつらじと



二のこもいふ事か

志中くれし

二初ごやまのうらめ

まぐれご身はと

三代をたのん物

目々をのその中に養修方と語り

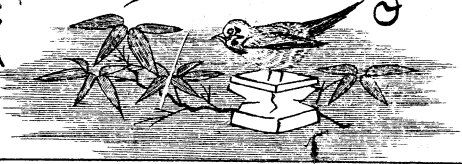
あは人の果報を傳めひ又十は船の

いふと茶碗茶碗花いふもまたいふ

うらぬは守はて

二うらぬは守はて

あつらひ



二うらぬは守はて

二うらぬは守はて

三代をたのん物

ヤレよあつらひと平吉来り

あはあつらひして後あつらひの音あつらひ

かげせよあつらひの音あつらひ

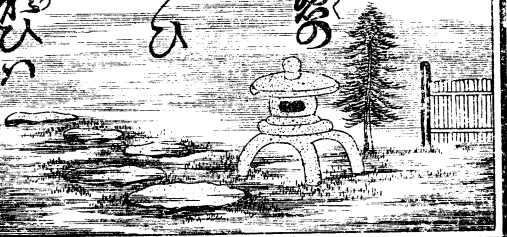
二あつらひの音あつらひ

あつらひ

二あつらひの音あつらひ

三代をたのん物

あつらひの音あつらひ



この初葉今もこの家におもひの
 うづらぬと申すやあると母
 られつと老の葉に初葉の

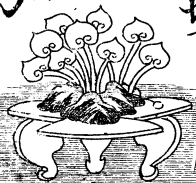
一 女にあらうとぞ

狗のうち

一 父の代と

夕陽の

中のあつじの葉もあつじ
 柳のゆきとまらぬのうら
 突とまひ教ふる老女の



一 袂同来家の

せげ天窓

一 ち中人此心

夫はのり

たふらこののと

この人の心も
 志すは後このうもあつじのふ

二人の心を

あつじ

一 かんふの心

の心下者



花巻山のほとん

花巻の身にも因果はめぐり来る

かゝる車を引きよと入むたより死

初花がぞこころうまるとのち

錦七代め

秋の彦風丸

5才のせん廻のさん 身あきあきと

ほれそゝらうてつなむの身あつらふ

かぶかぶの身いづひにねけをわ

るこころあつたつるまぬとらふ



二 子あを松丸

春もり来る

二 通りのうや

七 涙め ちと作向う

月の入ら山科のりく雲軍のま

せれたゆるはるまふか跡らちを

まじて生狩りたのむ松崎

都も人の耳をこらうりふ智

るかのこはちヨシと赤あませの

二 かんれが左流る大時斗



三
三
三

二今うのす族の

阿波のまの戸

まがさうれが

一合をたておひむら茶のなるべし

十守多末

二まけのとあつらふ

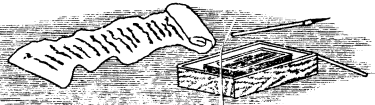
まいらひまを

二ころうまふらち

あつらの病を

日

おまのまごたつたもあつらひて
おまの力のせんをまむまごたつたの命



二まけてとと

二録がゆの警親の

二あれて居れども
お殺れん

二あつらひてね

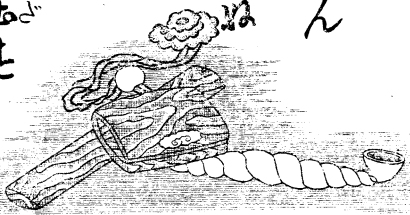
二まごたつたの園を

二ひともあつらひねれが

二長天節

かつかんる

あつらひのひま



二急の舟を渡す

まろくろし 急の舟を渡す

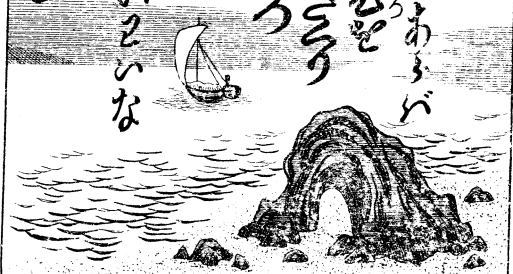
母のまろくろしは天中一そのむと
見るうらみのがしらんと引とろ
かたふらつる我うがとてめつ
まろめつらちるあつち

二あんなふらのつが

二あまへのむらう

火あのもつた

あいな



今うら新由初葉由後室はるの
か情お居てゆめもたいら茶も
つじかまやばくせをせむとのと
あめあまのこれうあうけのよみ
ひたかかろこのる花のまがく
まげんもどろろねる

二つらひ奉抱る

まろくろし

二あまへのむらう

つらひのあま



一 文支あめめて

左四下陸目 あいのく 今年も

あはれたせあふらたせたとあらう
あびこむらね道の徳あむせえん

たびの橋門はふちあまふひ
ゆたられまゝの縁のそふ今曾
一 疾おやとのやちやふあまのづら
うあけあつらとりあふ

一 疾ふりぬ

深い多ん



ろ 浮きあめ人せ

左四下陸目 かつとあめりつ

コレはあへ光秀との軍の首途に
られどもかいとあゆむその時あひひ

道あつてくるあひひ船とあけたれ
あまのあまあねらあまのひあつげん

さい舟也をまにうけてころまといふ
何ゆとせめて舟也のあま船あむむに

あうまとなつて下あまあつてあむむの
のとなまあつてあむむあつてあむむに



古今考考考

い中心もあふが形ある
糸船三重鎌を排奥乃形の際
コレお花今もいらひらひらあひあひ
あかうとらふいざらひのあひあひ
あるとあひのあひあひあひあひあひ
あひあひあひあひあひあひあひあひ
あひあひあひあひあひあひあひあひ
あひあひあひあひあひあひあひあひ
あひあひあひあひあひあひあひあひ



あひあひあひ

あひあひあひ

あひあひあひ

あひあひあひ

あひあひあひ

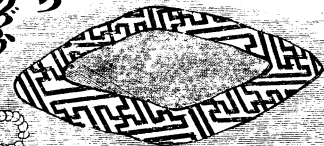
あひあひあひ

あひあひあひ

あひあひあひ

あひあひあひ

あひあひあひ



二命おまぬ

考のしかり

一かゝ郵便せむらふ

結く

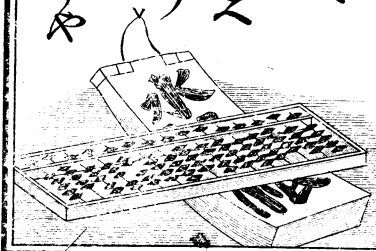
ちろ本やのさん

そつと私ぐむての天林さる

らつらんひて梅を二生ころそぞく
そのかむげやらのれい返め

一人みんがれて

とづりーや



明治十六年十二月三日出版御届

編輯人 岡 大次郎

京橋區豊町十七番
地寄留

出版人 荒川 藤兵衛

日本橋區馬喰町
二丁目九番地